人文科教育研究　20　1993年　pp.R13－22

「風雅の友との出会い」からみた『おくのほそ道』の教材的可能性

――尾花沢を中心に――

石塚　修

一、はじめに

『おくのほそ道』の中学校における教材としての価値をどのように見てゆくべきか、前号において、これまでの教材としての扱われ方を中心として考えてみた(1)。中学生にも高等学校の生徒にも、「月日は百代の過客にして」と始まり、「平泉」での感慨を教えてゆくという従来の固定化された教材のあり方が、はたして、本当の『おくのほそ道』への生徒の興味と関心を抱かせるのかどうか、それに対する問題提起を試みたわけである。今回は、前号の問題提起を承けて、具体的にどのような教材の編成をしてゆくことが、中学生に対しての『おくのほそ道』の教材としての可能性を広げることとなるのかを検討してゆこうと思う。

『おくのほそ道』の「門出」や「平泉」以外の章段についての教材的可能性を内側から問い直しているような論は、前号でも述べたように近年見受けることはできない(2)。わずかに、教材の編成という面から論を試みているものが、以下の二例である。

浮橋康彦「古典の教材化―組み合わせ法をめぐって―『おくのほそ道』を中心として―」(3)

檀上正孝・山岡　照「古典文学教育の研究と実践(7)―総合学習『おくのほそ道』の展開―」(4)

まず、先に挙げた浮橋論文は、「松尾芭蕉の『おくのほそ道』を中核とし、他の諸教材をこれに組み合わせることで、それぞれの解釈を深め、芭蕉文学の本質に迫る体験をさせる授業編成の試案」である。具体的には、『おくのほそ道』を中心としつつ、『源氏物語』（帚木）・陶淵明『帰園閑居五首』・『去来抄』・杜甫『春望』・謡曲『山姥』といった他の教材と絡めながら、高校生に教えてゆくかを論考したものである。そして、そうすることは、「芭蕉における古人への回帰や古典のパロディは、その文学の本質と言えるのであるから、適切な古典教材の組み合わせは芭蕉の本質に迫るとともに、古典の読みを立体化し、興味深くする最も有効な方法」となると述べている。方法のあり方としては、大変に興味深く、有効なように印象を受けるが、現場に取り込んで組み立ててみようとした時、相当な生徒のレベルを要求する授業となってしまうような陥穽が一方に潜んでいるようにも思える。

次に挙げた檀上・山岡論文は、井本農一氏の「芭蕉の取った態度（古典の受容態度）は、古典的世界に対する絶対的随順の態度である。伝統に対する無条件の受容である」(5)という説を引用し、

○古典文学教育においても、「古典の無条件の受容」すなわち古典の深い世界にまず、沈潜するような指導法を工夫しなくて

はならない。その後自分なりの感じ方、考え方などを掘りさげていきたいものである。そこから、伝統を踏まえた新しいものを産み出す素地も養われるであろう。

と述べ、「『おくのほそ道』を歩く」という単元を構成した報告である。具体的には、

○導入（〇・五）・「かどで」（二・五）・「白河の関」（二・〇）・「那須」「殺生石」「飯塚」（一・〇）・「松島」（読解三・〇、鑑賞四・〇）・「平泉」（二・〇）・「象潟」「大垣」（一・〇）・単元のまとめ（一・〇）

〈カッコ内は、配当授業時間数〉

といった構成となっている。修学旅行のコースと重ねての単元の設定であり、『おくのほそ道』をここまで本格的に時間をかけた実践例としては、良くなされているものといえよう。しかし、この実践も、これまでの『おくのほそ道』の教科書で扱われてきた部分の中に留まり、新しい視点に立脚しての教材としての可能性を探っているものとはいえない。すなわち、単元構成の組み換えを試みたにすぎず、新しい教材としての価値を見い出そうとした研究とはなり得ていないといえよう。

ここに挙げた二つの例を見ても、その依拠する所は、時枝誠記氏が述べたように、「古典教育の意義は、むしろ、現代にないものを求めるところにあるべきである(6)」という立場から古典教育を見てゆこうとしているところにあるようである。しかし、一方に、安西迪夫氏のように、「人間、社会、自然などに対する見方、考え方、感じ方が、現代に生きる生徒の問題意識に訴えやすいもの」を古典教育の教材となすべきである(7)とする立場もある。高等学校の生徒に向けての古典教育の一面には、確かに、あえて自分たちの生活からかけ離れた世界を知らせてゆこうとする部分があっても良いかも知れない。しかし、中学生が古典にふれてゆく時、そのような古典教育の姿勢が有効といえるだろうか。『おくのほそ道』を「平泉」の章段にのみこだわらず、他の章段と置き換えてゆく位の覚悟を持って見つめ直した時、「人々との出会いのよろこび」を中心とした扱い方が出てくるように思う。前号での問題提起を受けて、「風雅の友との出会い」に焦点を絞っての『おくのほそ道』の教材としての可能性を、個々の章段に当たりながら、以下検討してゆくこととする。

二、風雅の友との出会い

『おくのほそ道』が、その旅の目的の大きな一つとして、「いまだ相見ぬ風雅の友との出会い・会合」を抱えていたことは、堀切実氏(8)や尾形仂氏(9)の指摘がある。また、阿部喜三男氏も、『おくのほそ道』の旅の目的を、

(1) 歌枕をたづねる　(2) 自然に接する
(3) 自然よりも人事　(4) 古人の心を求める
(5) 漂泊の思ひ　(6) 俳風宣傳の意識
(7) 新風の追求　(8) 人生観より
(9) 紀行文への意欲

の(1)～(9)のようにまとめている(10)。こうした目的の中から、中学生に『おくのほそ道』を教える時に、いったい何を取り、何を捨てるべきかについては、前号で論じた。そして、その結果、今日の私達の旅へのイメージと大きくかけ離れて、『おくのほそ道』の旅が

あったのではなく、「古いもの」を実際に見てみたい、とか、同好の人と出会ってゆっくりと話をしてみたい、といったところに、中学生の『おくのほそ道』を学ぶ時の位置付けがあるとしてみた方が良いのではないかという結論に至ったのであった。それでは、『おくのほそ道』の数多くある人との出会いの中から、どの部分が、教科とするにふさわしいのだろうか、以下、考えてゆきたい。

『おくのほそ道』の中で、芭蕉が様々な人との出会いをしてゆく場面を、「門出」から順に挙げてみる。

(1) 日光　仏五左衛門
(2) 那須　草刈るをのこ・ちひさき者ふたり
(3) 黒羽　浄坊寺何がし・其弟桃翠
(4) 殺生石　（馬の）口付のをのこ
(5) 須賀川　等窮
(6) 信夫　里の童部
(7) 笠島　人
(8) 仙台　画工加右衛門
(9) 尿前の関　封人
(10) 山刀伐峠　究竟の若者
(11) 尾花沢　清風
(12) 羽黒山　図司左吉　会覚阿闍梨
(13) 鶴岡酒田　長山重行・淵庵不玉
(14) 市振の関　遊女
(15) 金沢　何処・一笑
(16) 山中温泉　久米之助
(17) 丸岡　天龍寺の長老・北枝
(18) 福井　等栽・その妻
(19) 種の浜　天屋何其
(20) 敦賀　露通
(21) 大垣　越人・如行・前川子・荊口父子ほか

以上のように(1)～(21)の場面に渉って、人々と出会っている。中には単に名前のみが紹介されている人物も、(12)の図司左吉、会覚阿闍梨、(13)の長山重行・淵庵不玉、(15)の何処、(17)の天龍寺の長老・北枝、(20)の露通、(21)の越人・如行・前川子・荊口父子のように見られるが、それ以外の部分では、何らかの芭蕉にとっての「出会い」を認識させるような場面となっている。さらに、実際にある人と出会ったことを中心として場面を展開しているのは、

(1) 日光、仏五左衛門
(2) 那須　草刈るをのこ・ちひさき者ふたり
(4) 殺生石　（馬の）口付をのこ
(5) 須賀川　等窮
(8) 仙台　画工加右衛門
(11) 尾花沢　清風
(14) 市振の関　遊女
(15) 金沢　一笑
(18) 福井　等栽・その妻

の、九つの場面に絞ることが可能であろう。また、この「出会い」の場面を見てくると、これまで、よく教材化されてきた、「松嶋」「平泉」「象潟」といった風光の地と重なり合わないことにも注目しておくべきであろう。風光の地では、自然の造化に感動し、人事のことには気にもとめなかったのだろうというような見方もあろうけ

れども、後日、『おくのほそ道』を練り上げてゆく中で、そこに芭蕉の創作の意識がはたらいていたと考えられるのではなかろうか。自然と人事の対応に『おくのほそ道』の二本の柱が立っているとするなら、「自然」にのみ中心をおき、その中に「人事」を垣間見るというパターンで『おくのほそ道』を見るような従来の教材のあり方に対する問題点が浮かび上がってくるのではなかろうか。

それでは、新しい観点に立っての『おくのほそ道』の教材として選定する部分としては、(1)～(18)の中のどこがよいと言えるだろうか。かって、浮橋康彦氏は、『おくのほそ道』の高校教材としての検討をし(11)「必修的四章を第一グレード」「他の六章を第二グレード」に分類している。(○が第一、△が第二)

○発端―芭蕉の旅の基本思想を語り、芭蕉その人の生き方と、この旅の目的をうかがわせる章として、必修的に扱われるのは当然である。

△草加―前の発端部を承けて、旅人の「我」を描いた部分で、前出部とやや重なる面もあるが、「旅の覚悟」「旅姿」を読み取らせるために、副次的に必要と思われる。

△那須野―牧歌的なロマンと、自然生活の中の人間的な暖かみを感じさせる場面として、『奥の細道』の中では余り多くないモチーフを備えているから、できれば採録したい。

○白河の関―「旅心定ま」る時点で、歌枕に寄せる思い、風景に古人を忍ぶ情緒を読ませる代表的箇所である。

△松島―風景描写と風景への感動を力強く表現した典型的な部分である。

○平泉―雄大な風景の中の廃墟に立って歴史の変転を思う精神の表現として、ぜひ必要な部分である。

○立石寺―「佳景寂寞」の中で、名句が生まれる。その簡潔にして力強い表現を読ませる部分として、重視されるのも当然である。

△象潟―東の松島に対して、力強い風景描写によっての西の象潟が、哀愁美をもってとらえられている。

△越後路―「荒海や……」の名句の背景として、また、「市振」まで収めれば、『奥の細道』の中で、「艶」と「運命」と「無常」をドラマチックに語る数少ない場面であり、『奥の細道』の学習に色どりをそえる。

△大垣―紀行の終章として、門人の情に心やすめる書き収めであり、かつ、一つの旅の終わりが、次の旅への出発点である―人生は旅そのもの―といった芭蕉の精神を、「発端」の章との対応で確認的に読み取らせる部分である。できれば採録したい。

以上のように、各章段を取りあげて、その教材としての可能性を説いている。先に掲げた、私見の部分との重なりを見てみると、「那須野」「市振」ということになる。その教材として適切であるという点においては、見解が一致するところであるけれども、たとえば「那須野」を、『奥の細道』の中では余り多くないモチーフを備えているから、できれば採録したい」と言っている点などは肯定できない。教材は、『おくのほそ道』のより正しい姿を、何とか数少ない部分の紹介で浮き立たせてくるような部分とすべきだからである。「那須野」は、先の私の指摘を見てもらえば判るように、けっして「余り多くないモチーフ」ではないのである。

三、仏五左衛門との出会い

「人との出会い」を中心として教材としての『おくのほそ道』を考えた時、私は、「那須野」「仙台」「尾花沢」の三つの章段がふさわしいのではないかと考える。そして、その三つを支えているのが、「日光」における仏五左衛門との出会いといえるのではなかろうか。教材とする部分とはやや離れるけれども、ここで論じておくこととする。『おくのほそ道』で、仏五左衛門は次のように描かれている。

> 卅日、日光山の梺に泊まる。あるじの云けるやう「我名を仏五左衛門と云。万、正直を旨とする故に、人かくは申侍まゝ、一夜の草の枕も、打解て休み給へ」と云。いかなる仏の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食巡礼ごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなす事に心をとゞめてみるに、唯無智無分別にして、正直偏固の者也。剛毅朴訥の仁に近きたぐひ、気稟の清質最も尊ぶべし(12)。

また、『曽良随行日記』では、四月一日の昼間に日光に参拝して、その夜、五左衛門方に泊まった(13)のにもかかわらず、『おくのほそ道』では、前日のこととしている点も注目すべきであろう。それは、芭蕉が紀行文を構成してゆく上での虚構であると考えられるが、何のための作為なのかを考えてみる必要があろう。安東次男氏は、『撰集抄』巻三「迎西上人ノ事」を指摘したり(13)、尾形仂氏は、前ジテの役割を果していると指摘したりしている(14)が、いずれにせよ、仏五左衛門その人の、ある性格に強い興味と関心を抱いたことは否めないであろう。その興味とはどのようなものであったのか、そこを考えねばなるまい。それについては、安東次男氏が、

> 西に馴染みの深い江戸の俳諧師が、初て下野という国に足を踏み入れて触れた珍しい人情、風土の実感だというところに、この段の見所がある。どこでも見られる宿屋の一亭主のはなしではない。東海道筋では、こういう話はとても拾えぬ、と芭蕉は言いたいのだと読んでもよい(15)。

と指摘し、また、麻生磯次氏は、

> 奥の細道の旅行の目的が、未知未見の風物に接するにあったことはいうまでもないが、それと同時に、辺鄙な地方の素朴な人情にも触れてみたいという気持があった。そしてその人物をまず日光山の麓で見出したのである。
>
> なまじいに才気ばしっていて、利害得失にぬけ目のないような人物は、彼の性格からしても肌があわなかった。深川の芭蕉庵のほとりに住んで薪水の労を助けてくれた浄求という道心者も愚智文盲にして正直一偏のものであったが、芭蕉はこういう人間を愛したのである。この一節には、彼の人間観、人生観のようなものがあらわれている(16)。

と見ているのも、慧眼であると思う。単なる日光山のすばらしさを際立たせるための道具立てとしての仏五左衛門だったのではなく、それ以上の位置付けが、『おくのほそ道』全体の上からなされているのである。そして、その仏五左衛門のような、「素朴な人情」を持つ、「正直」で「朴訥」な人々との出会いも、この旅で芭蕉の旅心を満たしてくれる旅の成果の一つであった。その延長線上に教材を探ってゆくことが、『おくのほそ道』を教材として考えてゆく上で必要不可欠なことであると言えるのではなかろうか。

四、那須野の出会い

『おくのほそ道』の中では、「那須野」での子供たちとの出会いも、先に、浮橋氏の指摘にもあったように、「牧歌的なロマンと、自然生活の中の人間的な暖かみを感じさせる場面」として、大切にされるべき部分であると思う。

……農夫の家に一夜をかりて、明ければ又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへども、さすがに情しらぬには非ず。「いかゞすべきや。されども此野は縦横にわかれて、うゐうゐ敷旅人の道ふみたがえん、あやしう侍れば、此馬のとゞまる所にて馬を返し給へ」と、かし侍ぬ。ちいさき者ふたり、馬の跡したひてはしる。独は小姫にて、名を「かさね」と云。聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成べし　　曽良

頓て人里に至れば、あたひを鞍つぼに結付て、馬を返しぬ。思わぬ「やさしき」事に出会う場面としては、「殺生石」の場面での、

是より殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付のおのこ短冊得させよと乞。やさしき事を望侍るものかなと、

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

の部分とも相通じ合うところがある。この「那須野」と「日光」との共通性については、前出の麻生磯次氏が、

農村にはやはりよいところがある。江戸などでは、こういう素朴な人は見られない。日光の宿といい、この那須野といい、ほんとうによい人にあったものだ。奥州にはいったら、もっと素朴な人たちにあえるだろう。そんなことを考えながら、先を急いで行く芭蕉と曽良の姿が目にうかぶような場面である。

先の「日光」といい、「那須野」といい、『おくのほそ道』での「人との出会い」という目的を考えた時に、とてもよくその側面を物語ってくれている。ただ、「日光」には句がなく、「那須野」にも芭蕉の句が無いのが残念である。句もある程度入っていて、文のまとまりも程よい所として、より適当なものが他にもありはしないだろうか。それを次に挙げる。

五、画工加右衛門との出会い

名取川を渡って仙台に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に画工加右衛門と云ものあり、聊心ある者と聞て、知る人になる。この者、年頃さだかならぬ名どころを考置侍ればとて、一日案内す、宮城野の萩茂りあひて、秋の気色思ひやらるゝ。玉田、よこ野、つゝじが岡はあせび咲こう也。日影ももらぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ。昔もかく露ふかければこそ、「みさぶらひみかさ」とはよみたれ。薬師堂・天神の御社など拝て、其日はくれぬ。猶、松島、塩がまの所々画に書て送る。且つ、絹の染緒をつけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其実を顕す。

あやめ草足に結ん草鞋の緒

この「仙台」の場面などは、比較的文もまとまっており、句も折り込まれていて良いのではないかとも思われる。文字通り「風流のしれもの」に出会った喜びが満ちている部分といえよう。ただ、中学校ではかなり難解、高校でも難しい部分となってしまっていることも否めない。たとえば、「年比さだかならぬ名どころ」といった

歌枕の地の説明は不可欠であるし、「宮城野の萩」「みさぶらひみかさ」といった語句の説明もしなくてはならないであろう。また紺染の「草鞋の緒」や「あやめ草足に結ん」なども、諸説あり、厄払いや端午の節句といった文化的背景をかなり丁寧にやらなくてはならないだろう。そうして考えてみると、この部分に深入りしてゆくことは、かえって『おくのほそ道』自体の全体像への印象を薄めてしまうことになりかねないということにもなろう。とすれば、もはや、適切な出会いの場面はないと言うことになるのだろうか。

六、尾花沢での清風との出会い

ここまで、「人の出会い」を念頭に置きながら、『おくのほそ道』のいくつかの部分を見てきたが、私の主張とよく一致する部分を思い出すことが、なかなか難しかった。教材としての分量の適切さ、もちろん、芭蕉の作品であるから、その部分に句が入っている方がよいことなどを考えあわせてみると、私は、「尾花沢」が最適であると思う。

尾花沢にて清風と云者を尋ぬ。かれは富めるものなれども、志いやしからず。都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知りたれば、日比とゞめて、長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまる也
這出よかひやが下のひきの声
まゆはきを俤にして紅粉の花
蚕飼する人は古代のすがた哉　　曽良

この部分は、この直前の「山刀伐峠」の部分まで含めて読んでみると、一層紀行文らしさが出てくる。「究竟の若者」に送られて、「此みち必不用の事有。恙なうをくりまいらせて、仕合したり」と言われ、「胸とどろく」思いで尾花沢に到着した芭蕉の安堵感がより鮮明に浮き出てくるからである。旅する者ならば多かれ少なかれ抱く不安からの解放感が、この「尾花沢」の部分にはよく表われていると言える。

芭蕉と清風との出会いは、貞享二年（一六八五）六月二日、小石川で、嵐雪・其角・才丸・コ斎・素堂らと、「古式の俳諧一巻と成就した」(17)に始まる。また、翌三年（一六八六）三月二十日にも、小石川で、挙白、曽良・コ斎・其角・嵐雪らと七吟歌仙の興行をした(18)。さらに、尾形仂氏によると(19)、『おくのほそ道』の途中、杉風に宛てた須賀川の等窮宅逗留中に出した書状があるとされ、その中では、

大かた明二廿七日又發足可致候。是方仙臺まで風雅人もえみへず候よし、……大かた六月初加州へ付可申候。出羽清風も在所に居候よし、是にもしばし逗留可致候。……

とある。清風と芭蕉は俳諧を通じて知り合い、芭蕉も『おくのほそ道』の旅で清風との再会を楽しみの一つに数えていたことを知ることができる。

『曽良随行日記』では、元禄二年五月十七日に、尾花沢に着き、翌日には、「十八日　昼　寺ニテ風呂有。小雨ス。ソレヨリ養泉寺移り居。」とあるように、清風宅へは十泊十一日の尾花沢滞在中に、わずか三日しか泊まっていない。このことから、清風の芭蕉に対する冷遇説を唱える説もある(20)。しかし、これについては、岡本勝氏も指摘するように、けっして清風がわざと自分から接待にあたら

なかったのではなく、当時二十六才の「三千風の縁につながる」村上素英を「ひきたててやるという意味もふくめて」(21)接待にあたらせたと考えるべきであろう。清風は、むしろ芭蕉たちに気を遣って「誰でも気軽に出入りのできるところであり、旅僧の芭蕉たちを歓待するには、まことに良い環境である」(22)養泉寺に移したと考えられる。そして、そうしたことが、清風一流の心遣いとなっているのであり、「さすがに旅の情を知りたれば」という芭蕉の賛辞へと結びついているのである。

そして、そうした風雅の人清風との再会が、芭蕉たちにとっては、内山一也氏の言うような、

いま考えても恐ろしさに胸とどろくような山刀伐峠の難路を無事に越えて、江戸でなじみの清風の顔を見たとき、二人はどんなに嬉しかったであろう。清風の方も江戸から遠い、この出羽の国の尾花沢のわが家に珍客を迎えた嬉しさ、互いにすがりつきたいようななつかしさだったろう(23)。

という心情を喚起し、「涼しさを」で始まる四句にはその心が一貫していると見た時、この部分の『おくのほそ道』での重さが見えてくる。また、この場面では、俳諧の習慣としての「挨拶付け」(24)を知ることも出来、その名手であった芭蕉の一面も読み取ることも可能である。そのことは、「涼しさを」の句についての、服部畊石氏の「現実の涼味と主人の厚意を兼ねたるもの即ち『涼しさ』を我宿にしてゆっくり打ちくつろいで休息すると、其地方の方言に興味をもち、直ちに応用して、主人清風に挨拶したのである」とする見解や、加藤楸邨氏のように「思ふに従来の挨拶が契機となって発想せられた句に、対詠的な臭み、すなはち、対者を意識したはからひが露出してゐたのに比すると、それが清められて純粋に心中を流出せしめて、それが結果として主人への挨拶となる境に達したものであらう」という見方(25)などからも十分に可能であると言える。

七、おわりに

「旅先での人々との出会い」とその喜びが、『おくのほそ道』の中の一つの大きな流れとして存在していることは、ここまでの個々の章段の検討から明らかになったと思う。しかし、ただ「人との出会い」にのみ注目したのでは、俳諧師としての芭蕉の旅『おくのほそ道』でなくては学ぶことができないということにはなるまい。やはり、それが「風雅の友との出会い」の喜びをこそ取りあげるべきであろう。「日光」の仏五左衛門や「那須野」のかさねとの出会いも、もちろん捨てがたい教材としての魅力もある。しかし、「仙台」の画工加衛門と「尾花沢」の鈴木清風との出会いの感激と比べた時、数少ない古典を扱う授業時間の中では、残念ながら後者を取らなくてはなるまい。さらに、加右衛門と清風という選択肢を示された時、章段の構成や句の内容から言っても、当然のことながら「尾花沢」の方を選ぶこととなろう。そして、「わび」「さび」といった芭蕉の俳人として持ち得た文芸理念への理解がなくとも、この「尾花沢」の章段は十分に読み取れ、共感してゆくことが中学生にも可能な章段であることも、教材の可能性を考えてゆく上で、有効な章段として認めることができるのではなかろうか。

『おくのほそ道』の旅は、実に多様な面を持っている。どの側面を捉えて教材とするのが良いのか、それには様々な見解が出てくることと思う。「平泉」にこそ『おくのほそ道』の最も大切な要素が

込められているとするのも、そうした見解の一つと言えよう。だからといってそれを金科玉条のごとくあがめて、中学生といわず高校生といわず「読ませよう」とする教材のあり方は、どう考えても正しい姿とはいえまい。『おくのほそ道』の旅は、人生を覚悟しての旅であり、悲壮なまでの決意によって支えられているとする見方が依然強い。しかし、我々自身が旅を思い立つ時、社会的な状況の変化は否めないとしても、そこに何を求めて旅立とうとするのかを、もう一度考え直してみる必要がありはしないだろうか。「蚕飼する人は古代の姿かな」の句を据えた辺りに芭蕉の思いを読み取ることも可能であろう。

今まで、ふり返られることのなかった「尾花沢」を『おくのほそ道』の中学校の教材として取りあげることの妥当性について考えてきた。さらに詳細な実践の報告については、後日改めて論及したいと思う。『おくのほそ道』の教材としての可能性は、より生徒の目の高さへとおろしてゆく中で広がってゆくと思うのである。

注

(1) 石塚　修『おくのほそ道』の教材的価値について『人文科研究』19号　一九九二・八　75～83ページ

(2) 国立国語研究所『国語年鑑』一九七〇～九一年版　国文学研究資料館『国文学年鑑』一九八五～九〇年版　参照

(3) 浮橋康彦「古典の教材化―組み合わせ法をめぐって―『おくのほそ道』を中心として―」『国語教育研究』29号　広島大学教育学部光葉会　一九八五・六　83～92ページ

(4) 檀上正孝、山岡　照「古典文学教育の研究と実践(7)総合学習『おくのほそ道』の展開」『広島大学学校教育部紀要』第1部第11巻　一九八八・九　91～113ページ

(5) 井本農一「芭蕉」『講座日本文学7　近世編1』三省堂　一九六九

(6) 時枝誠記『国語教育の方法』習文社　一九五四

(7) 安西迪夫他『改編　中学校高等学校　国語科教育法』桜楓社　一九九二

(8) 堀切　実『おくのほそ道』序章の漂泊観」『国文学解釈と教材の研究』34―6　学燈社　一九八九・五

(9) 尾形　仂『新訂おくのほそ道』角川書店　一九八四

(10) 阿部喜三男『詳考　奥の細道　増訂版』日栄社　一九七九

(11) 浮橋康彦「高校国語科における『奥の細道』」『近世文芸稿』28号　広島近世文芸研究会　一九八五・八　13～24ページ

(12) 井本農一校注・訳『松尾芭蕉集』『日本古典文学全集』小学館　一九八〇　に本文は依った。

(13) 安東次男『古典を読む「おくのほそ道」』岩波書店　一九八五

(14) 注(9)本文評釈　73ページ

(15) 注(13)に同じ

(16) 麻生磯次『奥の細道講読』明治書院　一九九二

(17)(18) 阿部正美『新修芭蕉傳記考説　行實編』明治書院　一九八二

(19) 尾形　仂「新資料・芭蕉「ほそ道」からの書簡」『俳句』角川書店　一九七七・一　124～131ページ

(20) 上石柳水『尾花の系譜』を『芭蕉と清風　おくのほそ道・尾花沢』芭蕉清風歴史資料館　一九八七　が指摘する。

(21) 岡本勝『大淀三千風研究』桜楓社　一九七二
(22) 注20「芭蕉の尾花沢滞在」
(23) 内山一也『鑑賞奥の細道』さるびあ出版　一九六五
(24) 伊地知鐵男他『俳諧大辞典』明治書院　一九九〇
(25) 岩田九郎『諸注評釈芭蕉俳句大成』明治書院　一九九一